
古今東西怪奇譚集

千石御堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古今東西怪奇譚集

【NZコード】

N0174D

【作者名】

千石御堂

【あらすじ】

古今東西、人と生き、人に生き続ける妖しき者達の小話。時に人を助け、時に人を殺める物の怪たちは今いざこ

其之一 木魅

そのねじこわんせんじからともなく現れた。

栗ちゃん。

ねうこひで、おじこわんせんじかいつかやつにきて、こつもわたしに
くづをくれるのだ。

あるとき、ねじこわんば、聞いた。

おめで、なんて名前だ。

「かえで」

わたしは、ただそれだけ」とたえた。

ただ、それだけなの」と、ねじこわんせんじがうれしそうに笑った。

ねつがそつが。かえでちゃんかあ・・・・。

ねじこわんせ、つぶやへつこななどもなんどもわたしのなまえを
よんだ。

やがて、ねじこわんはまたわたしに聞いた。

かえでひやん。おめで、こくつだ?

「こくつ」

わたしが、おじこちゃんがなにをかんがえているのかよくわからない。

でも、おじこちゃんはあいかわらずうれしそうだ。

そつがあ・・・かえでむぎやん五つ巴。わいそんなんだもんなんあ・・・。

そつこのひど、おじこちゃんまたいつももみたにこきなつすがたをけしとしほり。

いきなり、あらわれて、いきなり、あらる。

不思議な老人と楓の交流は、その口を境に止まつたつと止まつた。

「悪いわねえ、手伝わせちやつてや」

「いえ、こちからこそ勝手に押しかけて手伝いたいなんて言つてすみません」

これは本当にことである。

僕は進んでこの手づけを手伝いに来たのだし、配慮をされる身分などではないのだ。

今、お茶持つてくるわねと、叔母さんは引越しのダンボールを置いて、お茶を淹れに行つた。
この家も、あと少しでお別れになる。たしづめ、当家最後の一杯となるのか。

この家は、もともと親戚一同が寄せ合つて暮らしてきた古屋だった。だが、僕の両親が都会に越すことを決め、当時幼かつた僕も勿論一緒に付いていった。

だが、叔母一家は残つた。

その時叔母はまだ未婚だったし、残された祖父の面倒を誰かが見なくてはならない。

必然的に、叔母と祖父はその家に残されたのだ。

祖父のことに関して言えば。

僕は一部を除き、余り覚えが無い。

否、思い出したくないかも知れない。

祖父は非常に頑固な男だった。

年寄りというのはえとして頑固なものが、この田舎に数いる年寄りの中でも祖父は極めて硬い部類に入った。

子供嫌いだったのかもしれない。

僕は祖父に度々叩かれた。

悪いことをした時。

嘘をついたとき。

必ず、祖父は縁側の松の木の下に僕を呼び、厳しく叱つた。

何故叱られたのか、具体的な理由など思い出せないが、恐らく、些

細な理由、下らない理由だったのだろう。

だが、祖父は叱った。いつも、どんな時も祖父は怒っていたように思う。

怒っているとき以外の祖父を、思い出すことができないのだ。

この引越しを手伝った理由も、もともとは祖父にあったのではない
かと思つてゐる。

ここにくるまでは漠然と、ただなんとなく手伝おうとしていただけ
だが、今分かつた。

僕は祖父といふ忌まわしい記憶を今自ら消そうとしている。

祖父のいた家が潰れる事を見届けることで、自分の中に決着の糸口
を見つけているのかもしれない。

僕は、祖父が嫌いだつた。

「はい、お茶」

叔母さんはそういうて、縁側に座つていた僕に湯呑みをよこした。
軽く礼を言つて、僕は茶を口に流し込んだ。

熱いだけで、味も香りも何も無い茶だが、手伝いで汗を流し、
乾ききつた喉には充分過ぎる位だ。

縁側から小さな庭を眺めていると、従妹の楓あが遊んでいる姿が見

られる。

今年で五歳になつた幼い少女だが、何も無いこの田舎で元気一杯遊んでいふと聞く。

「ねえおにいちゃん……」

「ん? なんだい?」

小さい従妹の言葉に応え、僕は縁側を降りて庭に出た。小ぶりではあるが、松がそぞろに植えられた庭で、一際目立つた松がある。

幼い従妹はその松を指差しているのだ。

「ねえ、なんでこの松だけ赤い松と黒い松がいっしょに生えてるの?」

「これはねえ楓ちゃん。『相生の松』って言つんだよ

「あいおいの、まつ?」

「うん。松っていうのはね、長生きしますよつていうおまじないの意味があるんだけどね、この相生の松は特にそのおまじないの力が強いんだ」

「ふーん……? ジャあこの松があると、かえでもお母さんも、長生きできるの?」

「うーん……。うだなあ……かえでちゃんと良い子にしてたらきっと長生きできちゃう」

「

良い子にせんと、長生きはせん。

悪い子は閻魔様がしつかり見張りとるんじや。

お前が悪いことを隠しきつても、この松さんがしつかり見張りとるわな。

うそだ。松が見張る訳ない。

何故そう思つ。

だって、松は根っこが張つて動けやしないじゃないか。

馬鹿たれ。松さんはな、宗一。魂をもつとるんじや。魂がいつどこでもお前の悪事を見張つてある。
魂なんて、木が持つてゐるわけ無い。木は動かないじやないか。

あほつ。木々にはな。木靈があるんじや。

木靈?

そうじや。木靈が木に宿つてらっしゃる限りはお前を見逃しがたりは、せん

「おにいちゃん?」

従妹に呼ばれ、よつやく僕は元の世界に戻つてきた。

「どうしたの? ぐあいわるいの?」

「いや・・・なんでもないよ。大丈夫」

そうだ。

この松こそ 僕を嫌つた祖父が愛した、僕を叱つた、あの松の木なのだ。

「・・・ねえおにいちゃん、松のおじいさんって知つてる?」

「松の・・・お爺さん?」

「うん! 松のおじいさんはね、松の木に住んでてね、いつもかえでにくりをくれるんだよ!」

「松の木に住んで、栗をくれる?」

「うん!」

そつこえば
。。

宗一、わしが買つてきた栗じや。どれ、食め食め。つま
じゅうひん。

・・・おいしい。

そりじゅるそりじゅる。つまこじやひ。もつと食め。も
つと食め。

「ねえ聞いてる?おにいちゃん」

「・・・うん。聞いてるよ」

「おじいさんね、いつもかえでにくりをくれてね、うれしそうな
おをするんだよ」

楓は嬉しそうにその老人の話をしている。

祖父は、楓が生まれる少し前に亡くなつたのだそうだ。

わしの楓は、楓はまだ生まれんのか、と言つていたらしい。

祖父は、淋しかつただけなのかもしない。

祖母に先立たれ、僕が生まれたことによつて息子が家から出てしま
うことに耐えられなかつたのもしれない。

なんだか無性に

空しくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0174d/>

古今東西怪奇譚集

2010年10月9日13時11分発行